事例 3

教員のセルフチェックと英語の技能別アセスメントデータの活用で、英語の授業を魅力アップ

長野県 長野市教育委員会

長野市教育委員会は、2016年度から小・中学校にＡＬＴを手厚く配置するなど、英語４技能の育成を目指して英語教育に力を入れてきた。取り組みの結果、CEFR*1 A1レベル相当以上を有する中学３年生の割合が年々上昇。その動きを加速させるため、英語４技能検定を導入し、データに基づいた授業の魅力アップを図っている。また、検定のスコアと各教員による授業のセルフチェック結果を照合したことで、書く活動の課題が浮き彫りになり、全市での授業改善の方向性が定まった。

自治体概要

「明日を拓（ひら）く深く豊かな人間性の実現」を教育の基本理念に掲げ、教育施策を推進。2024年度には、子どもたちの「自学自習の資質・能力」を伸張する支援に重点を置いた、学校教育の実施計画「しなのきプランⅡ」を策定した。

人口 約 36 万 3,000 人　**面積** 834.81㎢
市立学校数 小学校 53 校、中学校 23 校
児童生徒数 小学校約1万 7,000 人、中学校約 8,600 人
教員数 約 2,100 人

英語４技能の育成を目指す授業改善に、検定を活用

長野市教育委員会（以下、市教委）は、2015年度に学力向上を目指して策定した「**しなのきプラン29**」の１つめのプランに「グローバルな視野の育成」を掲げ、国際理解教育とともに英語教育の充実に努めてきた。2016年度にはＡＬＴ13人を小・中学校に配置。2018年度に策定した「**第２期しなのきプラン**」でも英語教育を重点施策の１つとし、小学校英語の教科化を見据えて小学校のＡＬＴを増員するとともに、英語専科教員の活用も進めた。中学校では、スピーチコンテストやイングリッシュキャンプなどを実施し、生徒が英語をアウトプットする機会を拡充した。

2016年度以降、同市のＣＥＦＲ Ａ1レベル相当以上を有する中学３年生の割合は年々上昇していったが、全国の割合にはなかなか届かなかった（**図１**）。そこで市教委は、授業改善のさらなる推進が必要だと考え、英語４技能検定の導入を検討した。学校教育課の小泉一輝（かずき）指導主事は、次のように語る。

「子ども一人ひとりの英語力を的確に把握してこそ、効果的な授業改善が図れます。まずは検定活用の実績を積もうと、2018年度から中学校２校の３年生を対象に、英語４技能検定を先行導入しました。学習指導要領に準拠した検定であれば、特別な対策をしなくても検定結果を授業改善に生かせると考え、『ＧＴＥＣ』*2を採用しました」

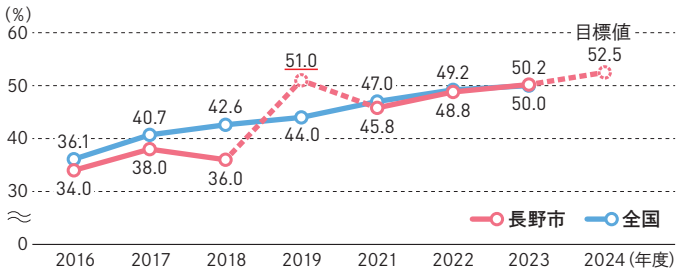
学校教育課
外国語活動・外国語担当
指導主事
小泉一輝
こいずみ・かずき
長野県公立中学校教員を経て、2021 年度から現職。

学校教育課
外国語活動・外国語担当
指導主事
丸山拓磨
まるやま・たくま
長野県公立中学校教員を経て、2023 年度から現職。

先行導入校の１つ、長野市立長野中学校は、スコアが低かったスキルの言語活動を授業の帯活動として全学年で重点的に実施。また、誤答分析で１年生の学習内容が定着していないことが明らかになったため、１年生の指導計画を見直した。そうして学校全体で授業改善に取り組んだところ、スコアは年々上昇していった。

先行導入校の実績を踏まえ、市教委では2021年度、小学１年生～中学３年生の各発達段階に応じた目標と具体的な取り組みを示した「**英語教育ビジョン**」において、2023年度か

図1　CEFR A1レベル相当以上を有する中学3年生の割合の推移



注１）全国の値は、「令和５年度　英語教育実施状況調査」による。
注２）長野市の 2019 年度は、調査方法が異なるため参考値。
注３）2020 年度は調査がなかった。
※長野市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

＊1　ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）の略称。語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、包括的な基盤を提供するものとして、2001 年に欧州評議会が発表。A（基礎段階の言語使用者）、B（自立した言語使用者）、C（熟達した言語使用者）ごとに２レベル、計６レベルが設定されている。　＊2　ベネッセが提供する、スコア型英語４技能検定。

図2 「セルフチェックシート」の項目と、教員の自己評価の集計結果（抜粋）

授業（言語活動）を魅力的に！ ～英語4技能検定を軸にした授業（言語活動）の視点～

各中学校の英語科教員の代表者が自己評価して提出したシートを一覧表にしたもの。

項目	領域	視点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	計
英語使用割合		教員が授業の 75％程度以上を英語で行っている	1	3	2	2	2	3	2	1	3	2	2	3	2	3	9
		生徒が授業の 60％以上の時間、英語で考えたり、英語を表出したりしている	1	3	2	2	2	3	2	1	4	2	3	4	2	4	8
授業マネジメント		生徒が言語活動を楽しんでいる	3	3	3	3	4	3	4	4	4	3	4	4	3	4	0
		1つの言語活動が、活動の説明や練習を含めて 15 分程度に設定されている	4	4	3	3	3	3	3	4	4	3	3	3	3	4	0
		1つの言語活動に対して、生徒の活動時間が 10 分以上確保されている	4													4	0
言語の扱い		言語活動を行う際に、場面・状況・相手の想定が必ずある	4													3	1
		言語活動を行う際に、生徒がターゲットセンテンスを含む英文を判断して使う流れがある	4													3	0
言語活動	聞く	日常的な話題について、話し手の意向を聞き取る活動	3													4	5
		まとまった量の英文を聞いて、必要な情報を聞き取る活動	3													4	2
	話す	即興で話す活動（チャット、スモールトークなど）　※授業冒頭での帯活動などを含む	1													2	7
		相手の話したことについて、質問をしたり、自分の考え（感想）を述べたりする活動	2	2	3	2	3	2	4	1	4	3	3	3	3	3	5
		やり取りを継続する活動　※複数ターンで思いやメッセージのやり取りをする	4	3	3	2	2	2	4	2	4	3	3	2	2	3	6
		まとまった内容を英語で発表する活動　※スピーチやプレゼンテーションなど	3	3	3	3	2	2	3	1	3	2	2	2	2	2	8
	読む	初見文を推測して読み続ける活動	3	3	2	3	2	1	2	3	4	2	3	4	2	4	6
		英文の内容と与えられた表などの情報を結びつけて考える活動	1	2	2	2	3	2	2	2	3	3	3	3	2	3	8
		まとまりのある初見文を読んで、必要な内容を読み取る活動　☆	1	3	2	3	3	2	3	3	2	3	3	2	2	4	6
		まとまりのある英文を読んで、概要や要点を把握する活動　☆	1	2	2	3	3	2	2	2	2	3	3	2	2	4	9
	書く	目的、場面、状況に応じて、即興的に自分の考えを書く活動	3	2	3	2	3	2	1	2	4	3	2	1	1	2	9
		自分たちでエラーを直す活動　※自分の英文を推敲する活動を含む	1	3	2	2	3	1	3	1	3	2	2	3	1	3	8
		あるテーマについて、自分の考えを整理し、まとまりある英文を書く	1	3	3	3	3	2	2	1	4	2	2	3	2	3	7
		読んだり聞いたりした内容について、その内容を英語でまとめて書く活動	1	2	2	2	3	1	3	1	4	3	3	3	2	2	8
評価		Can-Do リストでゴールが生徒と共有されている	4	3	3	3	2	2	4	3	3	3	3	4	2	2	4
		生徒が自らの学びを振り返り、蓄積している（フィードバック）	4	3	4	4	2	2	4	1	4	2	4	3	3	2	5
		学期に1回程度以上、パフォーマンス評価を行っている（授業内での ALT へのインタビュー、スピーチ、エッセイ、やり取りなどを含む）	4	4	4	4	3	3	4	4	4	3	3	4	4	4	0

A～N：各中学校の代表教員の自己評価
4＝よくあてはまる（よく行っている）
3＝まああてはまる（時々行っている）
2＝あまりあてはまらない（あまり行っていない）
1＝全くあてはまらない（全く行っていない）

自己評価で「2」「1」をつけた合計。数値が高い項目（地色が黄）は、授業で実施されていないことになる。

注）☆＝まとまりのある英文とは、おおむね 150 ～ 200 語程度以上の英文を指す。教科書では3～4ページを通して読むイメージ。

※長野市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

ら全市立中学校の3年生約3,000人を対象に、英語4技能検定を実施する施策を盛り込んだ。

「すべての中学校で、生徒が目を輝かせて言語活動に取り組む、魅力的な授業を実践してほしいという思いがありました。そうした授業を一人ひとりの教員が行うためには、全校での英語4技能検定の実施が必須だと考えました」（小泉指導主事）

スコアとセルフチェックの分析で書く活動の課題が浮き彫りに

授業改善には、英語4技能検定の結果とともに、市が作成した「**セルフチェックシート**」（**図2**）も活用している。同シートは、「教員が授業の75％程度以上を英語で行っている」「言語活動を行う際に、場面・状況・相手の想定が必ずある」など、使える英語力を生徒が身につけるために、目指したい授業・評価のあり方を24項目で示したものだ。各項目の到達度を4段階で教員が自己評価することで、自分の授業を見直すきっかけとしてもらうために導入した。

図3 2023年度　長野市の英語4技能検定のスコア

	合計	Reading	Listening	Writing	Speaking
長野市	446.8 (96.9)	96.3 (96.3)	105.4 (99.4)	139.3 (89.3)	99.5 (102.5)
全国参考値	461.0	100.0	106.0	156.0	97.0

（ ）内は、全国参考値を100とした時の長野市の値。
※長野市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

市教委は、セルフチェックシートの結果を英語4技能検定のスコアと照合して授業改善の方向性を見いだし、全校と共有している。例えば2023年度は、スピーキングのスコアが全国参考値を上回り、小学校にALTを手厚く配置し、話す活動に力を入れてきた成果が表れていたが、ライティングのスコアは全国参考値を大幅に下回っていた（**図3**）。丸山拓磨指導主事は、その結果を次のように分析したと説明する。

「ライティングのスコアを詳しく見ると、約4割の生徒が0点で、その大半が無回答でした。そこで、各中学校の英語科教員の代表者が提出したセルフチェックシートの集計を見ると、言語活動の書く領域の4項目すべてで半数以上の教員が『あまり行っていない』『全く行っていない』と自己評価をしていました（**図2赤枠**）。ライティングのスコアの低さは、書く活動の少なさに原因があることが裏づけられたのです」

無回答が多かった要因については、多くの学校が定期考査などの採点でスペルや文法の間違いを減点する方式にしているため、生徒が間違いを恐れて書くことを最初から諦めてしまっているのではないかと分析した。

市教委は、各中学校の英語科教員の代表者が参加する事後研修会で、ライティングの分析結果を説明。ライティングのスコアが高かった中学校では、自分が伝えたいことを１文で書けない時は、２文、３文と短い文に分けて書くよう伝えたり、自分が知っている単語で部分的にでも書かせたりするなど、正確さにこだわり過ぎない指導をしていることなどを紹介した。

さらに、「テストで正確さばかりを求めていないか」と、教員に問いかけた。そして、ライティングの採点を減点方式ではなく、英文の内容や構成、単語量、正確さといった評価規準を設け、内容面を加点評価するようにして、生徒の書く意欲を高めていこうと提案した。

各学校に指導主事を派遣。教員個々の悩みに伴走

事後研修会では、各学校が全国参考値と比較しながら自校の結果を分析し、浮き彫りになった課題と今後の授業改善について話し合う、少人数のグループワークも設けている。

「先生方は、『授業では自分が話してばかりいる。生徒が話す機会を設けたい』『生徒が自分の考えや思いを表現できるテストに変えたい』などと、自身の課題と改善策を語り合っていました。また、自身が実践している言語活動やＩＣＴの活用法も共有していました。教員間の学び合いが自然に生まれ、互いに刺激を受けている様子が印象的でした」（丸山指導主事）

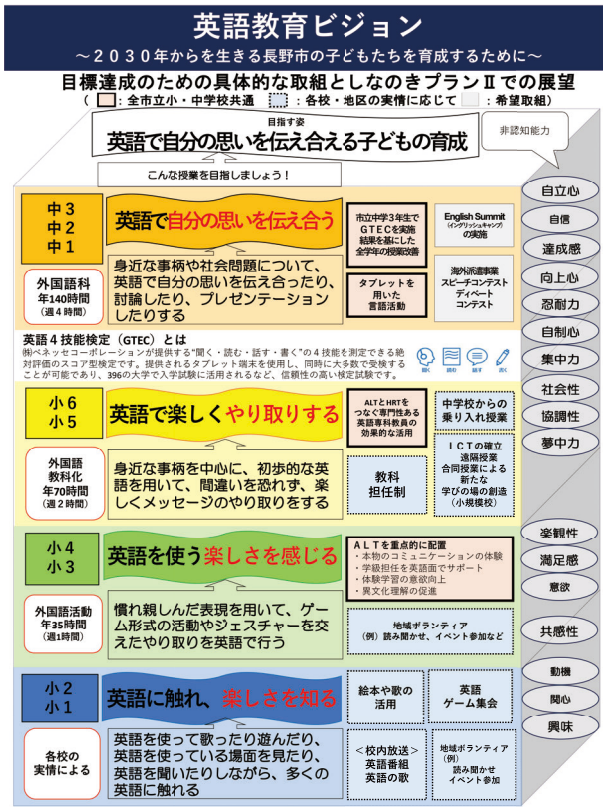
共有された言語活動の中には、カード遊びを通じて音と文字を結びつけて捉える練習を行うものがあった。例えば、“ＣＡＰ”と“ＣＵＰ”、“ＢＡＧ”と“ＢＵＧ”など、ＡとＵは日本語では同じ「あ」だが、英語では発音が異なる。そこで、ＡとＵを聴き分けて文字と結びつけられるよう、ＡとＵの音が含まれる単語のカードを並べ、ＡＬＴが発音した単語のカードを取る活動が紹介された。

市教委では、研修会で全校一斉に課題や実践を共有し、目標に向けた授業改善に役立ててもらう一方で、各学校の希望に応じて指導主事が学校を訪問し、教員個人の相談などに応じる「**しなのき派遣**」も行っている。

「先生方それぞれに悩みは異なりますから、先生方との対話を大切にしています。何に悩んでいるのか、その要因は何か、どう解決しようと考えているのかなどを、各先生に話してもらいます。話すうちに考えが整理されたり、内にある思いが顕在化したりして、自身で気づくことがたくさんあります。教員自身で解決策を見つけ、自律的に授業改善を進められるような伴走型支援を心がけています」（丸山指導主事）

しなのき派遣は、すべての教科に対応しており、教科横断型授業や探究学習、学習評価の方法、テストの作り方など、教員の様々な相談に応えているという。

図４　2024年度改訂「英語教育ビジョン」



※長野市教育委員会の提供資料をそのまま掲載。

今後の課題は、生徒の学習改善の支援

2023年度は、ＣＥＦＲ Ａ１レベル相当以上を有する中学３年生の割合は50.2%に達した。2024年度には、それまでの成果と課題を踏まえて英語教育ビジョンを改訂（**図４**）。一連の取り組みを通じて授業をより魅力的なものにし、国が「第４期教育振興基本計画」で示した「中学校卒業段階でＣＥＦＲ Ａ１レベル相当以上 ６割以上」は、2027年度での達成を目指している。

「今後の目標は、各学校が自走して授業改善に取り組むことであり、それと同じように、生徒も自律的な学習者になってほしいと考えています。生徒の主体的な学習改善を各学校が支援できるよう、教員研修や先生方への呼びかけを工夫していきます」（小泉指導主事）